

高松市・南昌市友好都市提携20周年記念

市民親善訪問団報告書

平成22年10月14日(木)～10月19日(火) 6日間

中国南昌・日本高松締結友好城市20周年留影



財団
法人

Takamatsu International Association
高松市国際交流協会

報告書目次

1	訪問団団長挨拶	1
2	出発式	3
3	南昌市での記念行事と親善交流	4
	歓迎式典と歓迎夕食会	4
	記念植樹・写真展	6
	親善交流	7
4	各コースの活動	21
	上海・蘇州コース	21
	景德鎮・黄山・上海コース	22
	九寨溝コース	26
5	さよならパーティー	31
6	帰国	32

ご 挨拶

高松市・南昌市友好都市提携 20 周年記念

市民親善訪問団団長

(財) 高松市国際交流協会副理事長 佃 昌道

財団法人高松市国際交流協会では、市民レベルの国際交流活動を通して、相互理解と友情を深める中で、高松市の姉妹・友好都市であるアメリカのセント・ピーターズバーグ市をはじめ、フランスのトゥール市、中国の南昌市と着実に交流の輪を広げてまいりました。

このような中、本年は 1990 年の南昌市との友好都市提携から 20 周年を迎えたことから、記念事業の一環として、市民親善訪問団を募集いたしましたところ、141 人の方々に御参加いただき、南昌市をはじめ、中国各地において、非常に有意義な親善交流を行うことができました。心より感謝申し上げます。

今回の訪問は、2010 年 10 月 14 日から 19 日までの 6 日間で、幸い天候にも恵まれ、中国への移動手段も高松空港からのチャーター機で往復する、大変便利で快適な旅行となりました。

また、大西市長を団長とする公式訪問団も一緒に訪中し、一足早く中国入りしていた住谷市議会議長を団長とする市議会訪問団と南昌市で合流して、南昌市人民政府主催の歓迎会や芸能交流、南昌市郊外の紅角洲湿地公園での記念植樹などの交流事業のほか、高松市日中友好協会をはじめ、高松市婦人団体連絡協議会、高松市司法交流団等、両市の民間団体相互の熱心な意見交換や、住谷議長とマツケンサンバチームによる南昌市育新学校の子どもたちとの心温まる交流なども行われ、両市の友好親善を深めることができました。

そして、南昌市での交流を終えた後は、上海万博や水の都蘇州を巡る「上海・蘇州コース」、磁器の里景德鎮や水墨画に描かれた風光明媚な黄山を巡る「景德鎮・黄山・上海コース」および、自然が創り出した神秘の世界を巡る「九寨溝コース」の 3 つのコースに分れ、それぞれが楽しく、また、観光の中にも中国への理解を深めるなど、有意義な旅行をされたことと存じます。

団員の皆様方におかれましては、今回の貴重な体験をご近所や友人の皆様方にお話しいただくなど、国際交流の輪を広げていただきたいと存じます。

最後に、当協会も本年で設立 20 周年という節目の年を迎え、今後とも、市民レベルの国際交流事業を一層充実させてまいりたいと存じますので、皆様方の御支援・御協力をお願い申し上げます。

2010 年 10 月

【出発式】

2010年10月14日 午後0時30分、秋晴れの高松空港国際線ロビーにおいて出発式が行われた。

高松市公式訪問団団長の大西高松市長の出発あいさつの後、市民親善訪問団の団長で（財）高松市国際交流協会の佃昌道副理事長から訪問団141人を代表して「南昌市をはじめ、中国各地を巡り、友好親善の輪を広げてまいります。」とあいさつがあり、続いて、姉妹都市委員会の立野省一会長からも出発のあいさつがあった。

そして、岸本副市長をはじめ、大勢の皆様の見送りを受け出発ゲートへ。出国手続きを済ませ、全員元気に中国東方航空のチャーター機に乗り込み、午後2時15分、高松空港を飛び立った。



【南昌市での記念事業と親善交流】

●到着・歓迎式典・夕食会

高松から南昌市までは、直行便で約3時間のフライトで、中国時間の午後4時（日本とは1時間の時差がある）過ぎに友好都市・南昌市の昌北空港に到着。入国手続きを済ませると、到着ロビーには「熱烈歓迎」の大きな横断幕が。



南昌市人民政府曾光輝副市長をはじめ、羅増明副秘書長、外事弁公室陳吉煒主任など、南昌市の関係者が拍手と笑顔で出迎えてくれた。

今回の訪問は、日本と中国との間で政治的に複雑な問題があった直後だけに、感激とともに少しホッとしたというのが正直な印象であった。



その後、大西市長の公式訪問団一行と市民訪問団の佃団長は、南昌市人民政府に表敬訪問のため空港を出発、我々市民訪問団一行は、観光コース毎にバスに乘車し、直接歓迎式会場の前湖迎賓館に向かう。途中混雑しているはずなのにスムーズにバスは移動する。不思議に思っていると、それもそのはず。バスの前後には公安（警察）の車両が付き、ものものしい雰囲気（VIP待遇？）で会場に到着。南昌市の並々ならぬ計らいに

感謝である。

歓迎会会場は、迎賓館というだけあって大変立派な建物で、装飾等の豪華さと会場の広さに全員がびっくりした様子。

歓迎会では、式典に先立ち、高松・南昌両市の芸能交流が行われ、南昌市からは、歓迎の踊りや京



劇などが披露され、その演技の素晴らしさもさることながら、衣装の華麗さに目を奪われた。

高松市からは、高松市芸術団体協議会の皆さんによる民謡踊り（南部俵つみの唄、金毘羅船々）と讃州三絃会家元の天弘房江さんによる津軽三味線（瀬戸、天きゅうの響き他）の演奏が披露され、日本文化の奥深さに会場から大きな拍手と喝さいを受けた。



芸能交流終了後、曾光輝副市長の司会で歓迎式典が進められ、始めに、趙東亮常務副市長の歓迎あいさつを受けた後、大西市長、住谷市議会議長、佃団長の順で訪問団受入れに対する感謝と、今後の親善交流の発展を祈念するあいさつが行われ、記念品の交換、そして、曾光輝副市長の発声で乾杯！！

宴会では、各テーブルに通訳の方を配置してくれており、それぞれが会話に不自由することなく、和やかな雰囲気の中で歓談。そして、豪華な南昌料理（ちょっと辛口？）がテーブル狭しと並び、全員舌鼓を打った。



●記念植樹・写真展

10月15日朝、ホテルを出発し、南昌市の中央を流れる大きな川、贛江に沿った紅角洲湿地公園へ。公園では、南昌市の関係者の方が準備を整え待っていてくださった。

羅増明副秘書長の司会進行で、趙東亮常務副市長、大西秀人高松市長、住谷幸伸市議会議長、南昌市長、南昌市民遠山建治様の挨拶の後、さっそく記念植樹が行われた。6本の楠の木を根元に、参加者が交替で土を入れていき、この木の成長とともに、両市の関係もより大きく成長していくであろうことを感じた。



植樹後、高松市からの参加者と南昌市の関係者全員で記念撮影を行った。

記念植樹終了後、高松・南昌友好会館に向かい、高松市・南昌市友好交流写真展を見学した。

会場には、両市の交流の歴史が展示してあり、20年の歴史を感じるとともに、今後もこの友好関係が末永く続くことを祈った。



午後、親善交流コースと市内観光コースに分かれ活動した。

【親善交流】

南昌市での友好交流

高松市日中友好協会
会長 藤本 良志美

私にとっては6年ぶりの南昌市は、空気が綺麗な秋晴れの好天気日でした。



平成22年10月15日朝、南昌市郊外の公園で行われた高松市・南昌市友好交流20周年記念植樹は、高松市公式訪問団と市民親善訪問団の総勢150人と南昌市幹部の方々と厳粛にそして和やかに行われ、両市の今後益々の友好交流を確認しあった行事となり、植樹後に全員で撮った写真は私達のいい記念になりました。

その日の午後は、私達高松市日中友好協会の会員14人は、訪問前から楽しみにしていた行事、南昌市の日本語学習者や高松への留学経験者達25人との友好交流会を高松・南昌友好会館で催しました。

外事弁公室の毛副主任、友好会館館長、そして、この交流会のために大会議室を綺麗な花で飾り、沢山の果物や美味しいお菓子を調達してくれた周さん達友好会館職員によって交流会は楽しく始まりました。周さんは10年ほど前に企業研修生として高松に3年間住んでいたもので、大の高松ファンなのです。

交流会に参加した25人の学生達には「くつわ堂せんべい」を佃副会長と遠山副会長から1人1人にプレゼントしたところ、高松へ来た経験のある学生達は高松を懐かしがってくれました。皆で手分けして持参した甲斐がありました。

通訳としては、2年前に香川JA研修生のリーダーで高松へ来た郭曉明さんが交流会に参加して双方の詳しい話になると通訳してくださいました。



とは言うものの、日本語を勉強している学生達との交流は、まずは全員が日本語で自己紹介しようということになり、名前と自分の趣味、希望などの話になりました。交流会参加のほとんどの学生が友好会館で日本語を学んだ経験があり、みんな日本語がとても上手で驚きました。

高松市日中友好協会としては、平成13年から高松・南昌友好会館へ毎年ボランティアで日本語講師を派遣している事の成果をじかに感じて大変嬉しく思いました。

参加者の中にはこれから高松へ留学したい学生も多く、具体的な質問もあり、佃副会長たちが丁寧に答えておられました。



予定の2時間はあっという間に過ぎて、全員で記念撮影の後、日本語を熱心に勉強している学生達全員が日本へ留学できる事を祈りながら、再び会う事を約束して友好会館を後にしました。

南昌市での嬉しかった事のもう1つは、14日の夕食時に、平成5年から約10年間、毎年行政研修生として高松市へ来ていた南昌市職員の方達8人が私のテーブルへ集まってくれて、楽しかった高松生活の思い出話に花を咲かせたことです。私はまるで同窓会の先生のように1人1人と抱きあいました。

さて、16日からは3コースに分かれて中国各地の観光となり、私は数年前からぜひ行きたかった四川省九寨溝コースに入りました。

実は、香大工学部の留学生だった李海君は四川省成都の出身で、私の家にもよく遊びに来ていました。そして3年前、私夫婦と彼の家族と一緒に九寨溝を観光する約束をして、彼は熱心に計画を立ててくれましたが、私方の都合で行けなくなり、李君に申し訳なく思っていました。その後、彼が名古屋大学院へ留学した年の5月、四川省大地震が起り、私は彼に電話してご両親の安否を確かめほったものでした。



また、高松市日中友好協会は四国華僑華人連合会等と共に丸亀町で街頭募金をしたり、会員からの募金も合わせて、日赤県支部を通じて四川省の被災地へ寄付金を送った経緯もあり、私はさまざまな思いを胸に四川省九寨溝へ向かいました。

四川省では、地震があった場所やパンダ生息地はコースになかったのですが、私にとっては、四川省を訪れたことは感慨深いものでした。

九寨溝は標高3千メートル以上の所にあり、9つの少数民族チベット族の集落があるので、九寨溝と言われているとガイドから説明があり、宗教に基づく色とりどりの幡がなびく集落の村長の家を見学することが出来ました。

九寨溝は壮大な山中に位置し、大自然を保持した美しい多くの湖には神秘的な青く透き通る水を蓄えており、世界自然遺産として相応しいと感動しました。



このたびの親善訪問は、人と人との交流、ふれあいの大切さを改めて感じた旅でした。

高松・南昌友好会館では日本へ留学したいと目を輝かせる学生達との交流、また、高松を第2の故郷と言ってくれる南昌市職員達との再会、そして、チャーター機と一緒に中国を訪問した方達との楽しい語らいや自然をめで合う観光を通して一つの大家族のようになった訪問団。日本人、外国人を問わず人と人との交流でお互いに理解し、友情を築けば世界から戦いはなくなると確信しました。

これからも高松市と南昌市の民間交流を大切にしながら、市民の手で友好交流の輪を広げていこうと思います。

最後に、この親善訪問を企画された主催者の方達に心から感謝いたします。



南昌市律師協会との交流

香川県弁護士会

弁護士 馬場 基尚

平成 22 年 10 月 14 日、高松空港を飛び立ったチャーター機の中に高松市・南昌市友好都市提携 20 周年記念市民親善訪問団の一員として香川県弁護士会訪中団もいた。平成 9 年 1 月、香川県弁護士会は日本の司法制度を視察するために来高した南昌市司法視察団と意見交換会を持っており、形の上では今回の訪中はその答礼ということになる。

時は、尖閣諸島沖の中国漁船衝突事件で日中関係が緊張状態にある中、今回の訪問団による訪中は危ぶまれていた。しかし、地方都市間や民間レベルの友好親善を深めるという大西市長の決断で計画通り実施されることになった。英断と言っていい。

訪中当日は、南昌市迎賓館で熱烈歓迎を受けた。翌 15 日、我々香川県弁護士会は法律関係の機関が入る南昌市内の 11 階建ての「南昌市司法局法律服務大樓」というビルディングに案内された。

中国では弁護士のことを律師と呼称するが、このビルには日本の弁護士会にあたる南昌市律師協会の他、公証人役場にあたる施設、日本司法支援センター（法テラス）にあたる施設、共同法律事務所、中国共産党南昌市司法局律師委員会などが入っていた。

日本には日本弁護士連合会という自治組織があるが、中国においては、弁護士は最終的には日本の法務省に相当する司法部という中央官庁の管理を受けている。

事務所の組織形態は日本では、個人経営の事務所が多数を占めるのであるが、中国の弁護士事務所の組織形態としては、以前 (1) 国営事務所のみが存在していた。ここでは弁護士は国費から給与が支払われ、公務員に準ずる待遇であった。現在は、これに加えて、(2) 構成員が無責任を負う組合類似の民営事務所 (3) 一定の事務所資産を責任財産とし、対外的に有限責任のみを負う合作制と呼ばれる株式会社類似の民営事務所が認められている。国の方針として、随時、国営事務所も組織変更して、民営事務所に向かっているという。

南昌市律師協会会長である呂建民先生ら、数人の律師による熱い歓待を受け、和やかなムードで懇談が始まった。国の体制の違いはあるが、在野の法律家であるという点にはなんら変わりはない。司法試験の合格率、開業の条件や南昌市における弁護士人口、年収など、いずれも具体的で実務的な話題で時間の経つのを忘れるほどで、あっという間に予定の 1 時間半を経過していた。

印象に残る話題を少し挙げると、「下海（シャーハイ）」という言葉。直訳すると「海に入る」という意味らしいが、日本で言うところヤメ検、ヤメ裁（公務員を辞めて在野の法律家になること）を指



す言葉であるそうだ。大陸の国家である中国ではさまざまな寓意を感じさせる言葉だ。私は束縛やし
がらみの多い陸から海に入り、勝手気ままに自分の好きなところに泳いでいくことが出来るという意
味に解かしたい。

また、「日本は法律制度が整っているのに、なぜ死刑制度が維持されているのか。」というややどき
っとするような質問があった。日本は法律制度が整っているという認識を中国の法律家が持ってくれ
ているのは大変光栄なことだが、その質問に対しては、死刑制度は、法律制度充実の問題ではなく、
国民の意識に根ざした問題であるとだけ答えるにとどめた。

中国は、漢民族として紀元前に統一国家を形成し、今日に至るまで異民族による進入に耐えながら、
そのアイデンティティを保ってきた国である。わが国との関係は文献上は、約 2000 年前の漢代に遡る
ことができる。両国が、近代国家に生まれ変わる過程で、様々な摩擦があったが、我が国と中国との
関係からすれば瞬きの間の出来事に過ぎない。

この国のことをよく知り、我が国のことを理解してもらおう。これこそが、今も昔もそして未来も、
一番大切なことのように思った訪中であった。



高松市婦人団体連絡協議会と南昌市婦女連合会との交流会について

高松市婦人団体連絡協議会
書記 安部 文代

今年（2010年）高松市と中国南昌市は友好都市提携20周年を迎えました。これを機会として高松市婦人団体連絡協議会では南昌市への市民親善訪問団に参加するとともに南昌市婦女連合会と交流を行いました。

- 1 交流会テーマ：活動（内容）を交流して、友情を語り合う
- 2 時間：2010年10月15日 午後14:00～16:00
- 3 場所：煌上煌集団有限会社 2階会議室
- 4 出席者
 - 1、高松市婦人団体連絡協議会 32人
 - 2、南昌市婦女連合会 20人
- 5 交流会次第

進行：副県級協調員 呉福妹

- ① 南昌市婦女連合会 周笑蓓副主席 挨拶
金木犀の香り豊かな時節にようこそ江西省にお越しくださいました。私たち236万人の女性団体は南昌市発展のために日々努力しています。交流分野の向上・婦人の友好も深めて行きたいと思っています。

- ② 高松市婦人団体連絡協議会 野田法子会長挨拶

1990年より高松市と南昌市との友好都市提携以来、文化・経済・産業の分野で交流が行われ、一方、小中学生や大学、企業などの留学生の交流など草の根の交流が活発に行われてきました。この度、市制120周年、友好都市提携20周年という節目に南昌市婦女連合会と私たち市婦連との交流が新たに加わり、国の違いがあっても、同じ女性同士として女性の地位、働き方・

子育てについての話し合いは大変有意義な時間を過ごすことができました。豊かな歴史と緑溢れる美しい南昌市、その女性団体との交流は新たな親善交流の糸口となり、意義深い素晴らしい思い出となりまして、今後の再会を誓い、高松市と南昌市の更なる交流の1ページとなることを期待しております。



③ 南昌市婦女連合会活動概況紹介

中国共産党による 59 年の歴史があり、党・政府の仕事を中心に、社会、婦人にサービスをするよう進んできました。更には婦人連合会の発展と権力の維持を目指しています。

社会福祉の面では、環境保護、経済発展に力を入れております。母親、婦人の権力を守るためにホットラインを設立し、家庭内暴力の追放のシェルターも作りました。婦人の権力の維持のために、団体は力強く働き続けます。

④ 懇談

高松市 活動の上で、ソフトとハードの両面がありますが、それはどのように？

南昌市 ソフトのプログラムは自分たちで、ハード面での資金は市政府、団体資金の一部を使うほか、社会からの寄付もいただいております。

高松市 プログラム作成は？

南昌市 プログラムの内容は毎日ではないが定期的に作成しています。

児童教育については家庭教育を大切にし、未成年への指導やネットワーク作り、留守児童へのセンターや母親教育のセンターも設立しました。

高松市 1995 年、アジアでは初めての「第 4 回世界女性会議」が北京で開催されました。野田会長と私はこの大会に出席いたし、意義深い北京大会の運びに感動したことを思い出します。そして、「平等、開発、平和」が北京宣言として公表されました。あれから 15 年今日の中国は目覚ましい発展を遂げているように見受けられます。この 15 年の間に女性の社会的地位向上に向けては、どのような取り組みをされたのでしょうか、お聞かせください。

南昌市 党の組織において専門分野で必ず、女性の代表を送るようにしました。それにより、女性の地位向上と育児休業法など制度の法制化が早く行われたのです。また農村部の女性に対しては家庭教育も行っています。

⑤ 記念品交換 景徳鎮の壺をいただく



⑥ 記念撮影



⑦ 煌上煌集团有限公司の歩 写真展参観
同有限会社の生産工場見学する



南昌市育新学校および江西農業大学南昌商学院との交流

10月15日、南昌市紅角洲湿地公園での記念植樹・全員での記念撮影。午後からは、南昌市内観光のグループと親善交流のグループに分れ活動。

住谷市議会議長とマツケンサンバチームは、南昌市育新学校を親善訪問し、交流を行った。

今回の南昌市育新学校との交流については、住谷議長の地元の高松市立弦打小学校と南昌市育新学校が、平成4年から相互訪問等の交流をしていたことから実現した。

我々が育新学校に到着すると、子どもたちが花束を持って迎えてくれ、手を引かれて交流会場へ。交流会では、住谷議長と育新学校の熊校長先生がこれまでの交流を振り返るとともに、今後の親善交流の一層の発展を確認して終了。



その後、運動場へ移動。育新学校の生徒約2000人の熱烈歓迎を受け、子どもたちの二胡や太鼓の演奏、そして踊りなど、運動場いっぱいには繰り広げられる演技に魅了された。

子どもたちの演技が終了し、最後にマツケンサンバチームが登場。コミカルな踊りや歌を披露すると、飛び入りで一緒に踊りだす子どもたちも出てくるなど、大喝采を浴び、踊りが終わったあとも、子どもたちから握手攻めにあうなど、心温まる交流となった。

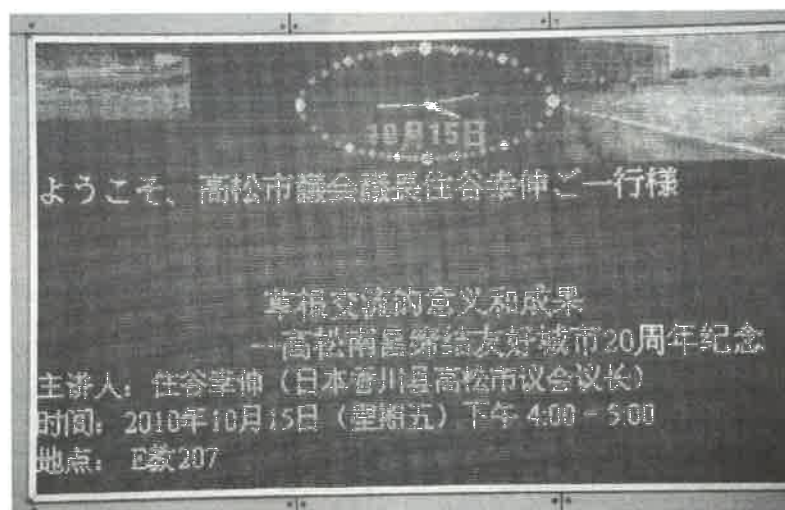


そして、通路いっぱいの子どもたちの拍手と歓声に見送られながら、マツケンサンバチームは市内観光へ出発。

その後、住谷議長は、もうひとつの訪問先である、江西農業大学南昌商学院へ。ここでは、日本語専攻学生を対象に「草の根交流の意義と成果」と題して、住谷議長がこれまで育んできた、高松市立弦打小学校と南昌市育新学校との交流をベースにした講義を行った。

参加した約300人の学生は非常に熱心に聞き入り、多くの質問が出されるなど、日本への関心の強さがうかがわれた。

終了後、大学関係者と懇談、大学側からは、日本の大学との交流を望む旨の要望が寄せられるなど、大変有意義な交流となった。



高松市・南昌市友好都市提携 20 周年記念市民親善訪問団に参加して

マツケンサンバチーム

代表 高橋 一成

何のご縁か、突然このツアーにマツケンサンバチームで参加しようではありませんか！との声上がり、まさか、本当に実現するとは、思っても見ませんでした。

しかしながら、このツアーに参加したことで、感動と一層の強い絆が生まれました。

以下、思いつくままに、友好親善のほんの一端をご紹介します。

10月14日（木）13時40分、岸本副市長を始め多くの方々の見送りを受け、大西市長の出発挨拶の後、総勢141名の訪問団が、一路、中国・南昌市に向けて、中国東方航空のチャーター便にて、高松空港を飛び立ちました。

私は、南昌・上海・蘇州をめぐるコース32名の一員として参加しました。

16時00分、南昌空港に到着。高松空港の何倍もの広さでびっくり。しかし、飛行機はちらほらと、いやに少ない。税関の検査を終え、南昌市迎いのバスに乗り込んで、歓迎会場の前湖迎賓館へと向かう。

前と後ろにパトカーが配置され、パトカーの先導により進むため、まるでVIP待遇である。

歓迎セレモニーの後、南昌市主催の歓迎夕食会が始まり、豪勢な中国料理（辛いものが多かった）に舌鼓。

飲んで食べて大満足のうちに、初めての宿泊地である南昌錦峰大酒店（ジンフォンホテル・☆☆☆☆☆五星）で一泊する。

翌朝、9時30分にホテルを出発し、紅角洲湿地公園にて記念の植樹を行い、そこからは各コースに分かれるため、我々、マツケンサンバチームは、育新学校へと向かう。

住谷議長のご尽力により、途中、合味源（高級レストラン）にて昼食（日本人好みの味に少しほっとした）の後、江西農業大学の副院長、袁（エン）さんのガイドで育新学校へ。

育新学校の校門に着くと、子どもたちが大歓迎してくれ、応接室へ通される。

応接室では、それぞれの自己紹介の後、熊校長と住谷議長との挨拶や記念品の交換を行い、それぞれの意見交換を行った。

この育新学校は、中国江西省南昌市の東部に位置し、1952年に創立された南昌市最大の小中一貫校（9年間）であり、自然環境にも恵まれ、パソコン教室、2万冊を超える蔵書をもつ児童閲覧室、200メートルトラックを備えた陸上競技場を有しており、総勢5000人ものマンモス校である。

高松市とは、平成4年に高松市立弦打小学校百周年事業の一環として、同校との国際交流が始まり、3年の周期で弦打小学校から今年7月を含めて、7回の訪問が行われており、国際理解教育の推進に努め、相互理解を深めているところである。

意見交換の後、続いて、育新学校の文化展示活動のため場所を移動、かわいい赤と白のコスチュームの女の子が我々一人一人をエスコートして、会場の来賓席に誘導してくれる。

渡り廊下の両側には、ぎっしりと子ども達が、赤や黄色のポンポンをふりふり大歓迎。着いた所は、2000人の児童生徒が整列するグラウンド。グリーン色に舗装された素晴らしい会場に圧倒される。



まず、校長や児童代表（中国オリンピックの国家を歌った女子を思わせるような、かわいい女の子）の挨拶の後、まず、全身真っ赤なコスチュームの小学4年生150人による、二胡の演奏に始まり、かわいいピンクのバレリーナ姿の小学2年生による、健康美・新体操。

グリーンの扇子を広げた児童をバックに、グリーンとピンクの中国服に身を包んだ中学2年生男女のハンカチ回しによる南昌民謡で、お茶の収穫を祝う踊りを披露。

中学3年生による安塞地方に伝わる腰太鼓の演奏などグラウンドいっぱいに繰り広げる様は、まさに感動の一語であった。

そして、最後に登場したのが、我が素人の、にわか作りであるマツケンサンバチームである。

「マツケンサンバ」と言えば、言わずと知れた「暴れん坊将軍」で有名な松平健さんの「マツケンサンバⅡ」を真島茂樹が腰元と町人風の衣装を着たダンサーが乱舞する振り付けにして、「2004 神宮外苑花火大会」で披露されたのがきっかけで、全国的に大ブームを巻き起こしたことは、ご存知のとおりであります。

これの振り付けDVDを基に練習を重ね、市民会館での「市民の集い」や地域の夏祭り、あるいは、老人ホーム等での慰問活動を細々と続けているチームである。

メンバーは、私こと高松の健さん（そんなええもんか？）と腰元ダンサーズで、高松市女性防火クラブ連絡協議会会長の田所会長、小西副会長以下8名であるが、1人異色の腰元が！、



なんと高松市議会議員、波多議員である（よく似合う）。でもって、交流会の最後を飾って、グラウンドいっぱいに一生懸命に、マツケンサンバを歌って踊りまくりました。

途中からは、育新学校の子どもサンバチームが飛び入り参加し、我々とコラボレーション。踊りが終わったときには、会場を割れんばかりの大拍手の嵐（少し

大げさかな)。

しかし、踊りを終えて帰ろうとすると、子供たちが怒涛のごとく押し寄せて、握手やらタッチやらで大混雑になり、先生方が静止するのに一苦勞でした。

まことに、ふと思ったのは、芸能人とはこんな幸せな感じではないか、だから一度はじめてたらやめられない「かっぱえびせん」なんやと思った瞬間でした。(笑) 本当に、素晴らしい感動をくれた育新学校のみんなに、後ろ髪を引かれる思いで育新学校を後にしました。



その後は、飛行機で上海へ飛び、上海銘徳菜星頓広場（レキシントン・プラザホテル☆☆☆☆☆五星）に移動し、16日から19日にかけて、上海ヒルズ展望台や豫園、蘇州の虎丘斜塔、中国2010上海国際博覧会の見学、夜の観光クルージングや上海雑技団の素晴らしい演技や夜景に、只々感動しまくりのうちに、最後の夜のさよならパーティーを迎えてしまいました。

さよならパーティでは、三味線の家元、天弘さんの飛び入りで再度「マツケンサンバ」や「一合まいた」の総踊りで、熱気が盛り上がった余韻を胸に、上海空港を後に高松に無事帰ってまいりました。



旅行中、尖閣諸島問題で反日デモが多発し、ご心配をおかけしたと思いますが、そんなことはまったく見られず、平穩無事でした。まさしく、草の根の民間交流が出来たものと思っております。

あっという間の6日間でしたが、本当に充実した友好親善が出来たものと思っています。

これもひとえに、大西市長はじめ関係する皆様方のご尽力のおかげと心から感謝を申し上げますと共に、

紙面をお借りしてお礼を申し上げます。

また、天候にも恵まれ、友人やスタッフにも恵まれ、全員が無事に帰国できましたことを喜んでおります。

結びに、関係各位の今後ますますのご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げつつ、願わくば、また、このような機会に皆様方との再会ができますことを夢見て、筆をおきます。

謝謝！

【各コースの活動】

【上海・蘇州コース】

10月16日午前、うす雲の掛かった上海浦東国際空港に到着し、話題のリニアモーターカーに500円也で乗車。龍陽路駅までの約30キロを、305キロの表示に喜んだり、写真を2枚撮っている間の7分間で到着。

上海は、高層ビル群も動き出しそうな活気あふれる街。上海料理は、南昌市の味付けよりも辛さが緩く、日本人向き。昼食後、目指すは、上海ヒルズ（森ビル）の世界一の展望台へ。1時間並び、疲れてようやく到着。絶景は言うまでもなく、中国滞在中、ここだけにシャワートイレがあったことに感激した。



上海一番の観光地「豫園」でも、世界中からの観光客に揉まれながら、グループの人たちがはぐれない様に気を使うばかりで、写真1枚も撮れなかった。その夜の黄浦江ナイトクルージングでも、650人乗りの観光船が25隻フル回転なのに、30分間待ち並んだ後、押されながら乗船した。しかし、来た甲斐があった。きらびやかで映画のワンシーンのような夜景には、今までの混雑も暫し忘れ、素晴らしいひとときと感じた。

翌日は、蘇州1日観光。翌々日は、上海万博。どこもかしこも人の多さに、半ば呆れながら、中国の熱気と躍動感に打ちのめされた。



滞在中、抗日デモが各地で勃発し、留守を守る高松の人々に大変御心配をおかけしたが、私達のグループは、そんな反日の気配を感じることもなく、どこもかしこも、ただ人の多さに圧倒されながら過ごした上海滞在であった。

【景德鎮・黄山・上海コース】

10月16日

他のグループを見送り、我々景德鎮・黄山コースは1号車32名、2号車29名、各バスにJTBの添乗員と現地ガイドが乗りこみ、総勢65名で8時30分景德鎮へ向け出発。

3月に開通したばかりの高速道路を走る。いつもは、怖いくらい飛ばすバスが、時速90キロくらいの超安全運転。聞くと、罰金は運転手の自己負担なので無理はしないということらしい。

路面はとても滑らかで、バスの乗り心地もいい。けれども、何か違和感がある。何かと思ったら、走っているのがトラックばかりで、個人の自家用車的なものが全くない。途中のサービスエリアのような所も、日本ではたくさんの人で賑わっているが、ここは閑散としている。

ということで、渋滞にも遭わず予定通り12時に景德鎮へ到着。到着早々昼食。とさかのついた鳥料理が出てきて、思わず記念撮影。

昼食後、陶磁器歴史博物館見学。

ここは、田圃や茶畑が広がる楓樹山にある野外博物館で、景德鎮市内の古建築が移築され、祠堂を中心に、古民家、街道、池や川が配置されて中国の昔の村落を再現している。それら古民家の中には景德鎮の歴史と、

各年代の陶磁器名品が展示されている。

また、粘土をこね、ろくろで形を作り、高台を削り、絵付けをし、釉薬をつけ、

窯で焼くという伝統的な陶磁器製作の過程を、味のある職人さんたちが再現している様子も見学できた。職人さんにカメラを向けると、おもむろに長いキセルを出して、ポーズをとってくださった。

また、高さが5メートル～6メートル以上もあり、中に何百個も壺を並べて一気に焼き上げることのできる世界一大きいといわれる窯



や、昔の窯を復元した窯跡などを見学し、次の目的地、陶磁器工場へ。



ここでは、陶磁器大学を卒業したばかりの若い職人が黙々と作業をし、腕を磨いていた。



見学終了後は、そこに隣接しているお土産店へ。皆さん、それぞれ買い物をされていたようだが、いいものを見つけられたのだろうか。

16時、景德鎮を後にして再び真新しい高速道路で一路黄山へ。今年3月開通ということだが、この高速がなかったら何時間かかっていたのだろうか。

快適なドライブができて幸運だったと思う。



19時、黄山到着後夕食。南昌では、料理が辛くて食べられなかったという方がいらしたが、黄山ではほとんど辛いがない。辛いのが苦手な苦勞されていた方たちは一息ついて、やっと食べられると喜んでいらした。明日は、早朝から山登りが待っているので、たくさん食べて、早めに休んで翌日に備える。

10月17日

7時30分、ホテルを出発する。ホテルの標高は約200メートル。

ここからバスで1時間30分かけて、標高約900メートルの雲谷ロープウェイ乗り場へ到着。

そしてここから、一気にロープウェイで約10分、延長2808メートル、標高差773メートルを昇り、標高約1700メートルへ。

途中から次々と垂直のそそり立つ岩山と緑濃い松の木が目に飛び込んできて思わず歓声を上げた。

黄山は、伝説上の皇帝、黄帝がこの山で不老不死の霊薬を飲み仙人になったという伝説からきているらしい。黄山の山々は古生代にでき、その石や岩は氷河や風雨による浸食が一億年にわたって繰り返されてきており、独特の峰はまさに水墨画の世界。

ロープウェイを降り、始信峰、筆架峰などの有名な絶景を眺めながら、岩と階段3.5キロメートルの道を約2時間、昼食会場の北海飯店まで歩く。

黄山は、一年のうち240日は霧がかかっていて景色が見えないといわれているが、この日は雲ひとつない快晴。

残念ながら雲海は見ることはできなかったが、これ以上望めないくらいの天気にも恵まれ、遠くまで見渡せ、感動の景色の連続だった。

昼食会場の北海飯店は、この岩山の上にこんなに立派なホテルをどうやって建てたのだろうかと思うような大きなホテルで、その上トイレは水洗。ホテルの食事や、部屋の洗濯物なども全部人力で運び上げているのに、この水は、どこから来て、どこへ行っているのだろうか。

昼食後は、体力に合わせて、3コースに分かれ、黄山観光をする。



黄山は独立したひとつの山ではなく、70 を超える群峰の総称で、ホテルの周りにも、清涼台、獅子峰、猿が海を眺めているような形をした岩などの見どころが多々あった。

そのあと、再び、ロープウェイ乗り場まで歩いて帰るが岩道が続く中、連続した400段を超す階段が立ちはだかる。皆息が上がり休み休みでないと歩けないような、きつい道のりだった。このツアーには、清水さんというご夫婦も参加されていて、ご主人の方は92歳だそうだが、黄山観光は言うに及ばず、帰りの階段もすべてご自分の足で歩かれる姿を見て、他の参加者一同、皆すごいと感動した。このご夫婦は、旅行も世界各地行かれているそうだし、それ以外にもいろいろなことに興味をお持ちで、理想のご夫婦だった。



最後に、窓から見える景色を堪能しながらロープウェイに乗り下山。

あと、何日か遅かったら、この緑が紅く色づき、違う美しさが楽しめただろうし、雪の時期はまた別の美しさがあるのだろうが、それは、また、いつかの楽しみということで、次回に残しておこう。

このロープウェイも、急な角度で降りていくため、スリル満点で楽しめる。片道80元、日本円で1100円位。地元の人にとっては少し高いのかもしれないが、我々には十分その価値があったと思う。

下山後は、おみやげ物店に寄り、黄山名物の石製品や、墨、硯などを見る。そのあと、夕暮れの黄山老街見学。小さな、中国らしいお店が連なる商店街をぶらぶらしながら、お茶やお菓子を買った。大きなお土産物屋もいいが、こういう商店を散策するのも楽しい。



19時、夕食。上海へ向けての飛行機の出発時間は22時30分なので、それまで、足つぼマッサージコース、黄山芸能観劇コース、各自自由コースに分かれて時間をつぶす。再び集合した時は、期待以上に楽しめたという声が多く、それぞれ充実した時間だったようだ。

中国では、乗り物が遅れるのは当たり前、しかも1時間から2時間遅れなんてざらにある、ということをよく聞く。夜も遅いので遅れるといやだと思っていたが、恐ろしいくらい定刻に離陸し、定刻23時30分、上海空港に到着した。本当に幸運だった。

ホテルに到着したときは、もう夜中の1時になっていたが、朝早くから、充実した一日だった。

10月18日

上海では、蘇州に行くグループ、万博へ行くグループ、自由行動など分かれてそれぞれ観光を楽しんだ。

【九寨溝コース】

10月16日（土） 南昌から成都経由で九寨溝へ移動

朝、薄暗いレストランで朝食を済ませ団員それぞれ自分で荷物をバスへ運んで6時南昌錦峰ホテルを後にした。バスガイドは元気いっぱいの女性で、昨日の夜、ホテルの部屋割りでも2、3時間しか寝ていないとか、生活のためご主人さんにも家事など協力してもらって一生懸命仕事をしていることを話してみんなに感銘を受けさせた。

6時40分、南昌昌北空港到着。確認したところ、荷物を一つバスに乗せていなかったことが判明。すぐに添乗員が連絡し、ホテルのフロントで見つけたが、この便にはもう間に合わないのでは上海で受け取るしかないと言われた。でもどうにか時間稼ぎをして、荷物の到着を間に合わせた。



7時55分、南昌空港を離陸して成都へ。南昌から成都までの飛行距離は1150キロ、飛行時間約1時間50分。

10時05分、成都双流空港着後、荷物を受け取ってからバスで市内へ移動。有名な陳麻婆豆腐店で昼食。口に火が燃える覚悟で食べてみたが全然辛い。期待外れですこしがっかりした気分。食事してからまた成都空港へ。

空港の売店に九寨溝の観光DVD（日本語字幕入り）や絵葉書が店頭並べてあり、とても綺麗に制作されていたのでつい買ってしまった。成都から九寨黄龍空港行きの航空便は地理的に気象条件が悪く、霧による視界不良や気流の不安定による運航スケジュールの乱れが頻発している。なので中国国内では「九黄九黄、十飛九黄」（九黄空港への便は十便飛んで九便遅れるか欠航）と揶揄されている。今日も掲示板に幾つかの便の遅延表示が出た。私達が乗るMU5867便も少し遅れの離陸。40分後、無事九寨黄龍空港に到着。空港は海拔3447.68mの所に建設され、離陸に必要な揚力が得にくいいため、3400mの長大な滑走路が設けられている。空港に降りたとき、空気が薄く何人かの団員は波打つ船に乗ったような感じがして、頭痛にも襲われた。



成都から別の便で来る高松南昌友好会館日本語講師の白井ご夫妻と合流し、90キロ先に離れているホテルへ移動。山道ばかりの上、九つの急カーブもあり気分が悪くなりいつ到着するかと2時間ほどの道程はすごく遠いと感じた。夜の帳がすっかり降りた頃、やっと山の峡谷にある九寨溝シェラトンホテルに無事到着、ほっとした。

10月17日（日）九寨溝一日観光

朝、ホテルから2台の九寨溝園内バスに乗り、いよいよ憧れの九寨溝へ。奥地にあるため、気温がかなり低い。多くの観光客はダウンコートにマフラーという真冬の服装。九寨溝の入り口でコース全員の記念撮影をした。（一枚千円で希望者に販売された）。

九寨溝は1992年に世界遺産に登録し、四川省の成都の北約400キロ、岷山山脈の奥深いところに位置し、総面積は約6万ヘクタールにわたる。手つかずの原生林の中に大小108の湖、泉、滝などが分布しており、その自然が織り成すエメラルドグリーンの世界はまさに秘境である。風景区は、樹正溝、日則溝、則查窪溝という3つのY字型の峡谷により構成されており、全ての長さを合わせると60キロほどになる。

溪谷（溝）にチベット族の暮す村（寨）が9つあることから、この名が付いたと言われる。原始林を背景に、大小合わせて108もの湖が点在している。チベット族の間には、昔、山の女神が天界から落とした鏡が108つに砕け散って湖になったという伝説が残されている。伝説に彩られた湖面は、雪を頂き白く輝く峰や色鮮やかな樹林、澄み渡る青空など周囲の風景を鏡のように映し出し、まるで一枚の絵画のようである。



九寨溝の入り口の標高は約1900m、一番奥の長海は3150m、各観光スポットは2000～3000mであるが高山病予防の酸素ボンベの世話になることもなく、盆景灘、五彩池、長海、諾日朗瀑布、五花海、真珠灘瀑布などの景観スポットを楽しむことができた。

「盆景灘」

九寨溝の代表的な観光スポット。川の浅瀬のあちこちに植林をしたように樹木が見える。その樹木が盆栽のように見えることからその名が付いたという。



「珍珠灘と珍珠灘瀑布」

海拔2443m。浅瀬を流れる水が真珠に似ていることから珍珠灘の名が付いたという。

水量豊富な珍珠灘はやがて幅約200m、落差40m大きな滝となって落下する。80年代に中国で放映された人気テレビドラマ「西游記」のロケ地。

「五花海」

九寨溝で最も澄んだ湖といわれ、湖中の倒木がはっきり見える。別名「孔雀海」。九寨の人々は五花海が神の池であり、その水が撒かれるところには花が綺麗に咲き、森が豊かに茂るといふ。そこは結婚記念写真を撮影する人気スポット。私達もレンタルしたチベット族の民族衣装を着て思い出になる一枚をカメラに収めた。



「诺日朗瀑布」



海拔 2365 m、高 24.5 m、幅 270 m。大きなカルシウム化瀑布で中国の六つ最も美しい滝の一つでよく九寨溝のシンボルと象徴として使われる。诺日朗（ノールラン）はチベット語では雄大、壮観の意味。

盆栽灘の近くにあるチベット民族文化村の前には九つのチベット族ラマ教の白い仏塔が立ち並び、マニ車を回しながら念じて歩く姿もみかける。道沿いにはコスモスが目を奪われんばかりに綺麗に咲いている。

観光の途中で、あるチベット族村長の家を見学した。ヤクを祭っている家の前で村長さんは片言の日本語で挨拶した。その後、マニ車を回しながら経を読み、部屋の中に案内され、バター茶が振る舞われた。家というよりももうお土産店という感じ。





この日の昼食は諾日朗（ノーリラン）

観光センターのレストランで50元のバイキングを食べた。センターの中庭には売店が軒を連ねて大勢の買い物客で賑わっている。夜はホテルにある劇場で行われるチベット民族歌と踊りのショーを見に行った。入り口で心からの敬意を表す哈達（カター）と呼ばれる白いスカーフを渡され、みんなそれを首にかけて九寨溝最後の夜を楽しんだ。ホテルに戻り、現地ガイドさんから、明日九寨溝空港を出るが、カイロはスーツケースに入れず、手荷物にしてほしいと注意された。なにか鉱物のチェックが厳しいらしい。来た時は何も問題がなかったのに。



11月18日（月）九寨溝から成都經由で上海へ移動

5時45分集合して6時にホテルを出発した。バスの中は冷え込んで、暖房を入れてもらった。周りがまだ暗いため、高く聳える山の峰々と木々が空にくっきりとしたシルエットを描いて神秘的な世界を作った。夜が明けて背中に霜を被ったヤクの姿が丘のあちらこちらに見えた。

九黄空港の搭乗手続きカウンターは朝から大混雑。荷物を預かるには随分時間がかかった。ようやく9時10分発MU5862便にのり、成都經由で上海へ飛び立った。15時25分上海浦東空港に到着。ホテルに向かうバスの中から上海万博の会場や森ビルなど車窓観光できてよかった。

九寨溝コースは乗り換えと移動が多いため（MUも九寨溝から上海への直行便が飛んだらどんなに便利かとしみじみ思った）、大変だったが、47名は全員怪我なく、無事で他のコースの皆様とさよならパーティーで再会できたことをなにより嬉しく思った。

「黄山より帰りて山を見ず、九寨溝より帰りて水を見ず」という中国の諺があるが、またいつか行きたいと思う。



【さよならパーティー】

先着した上海・蘇州コースと、17日深夜と18日夕方にそれぞれ到着した景德鎮・黄山コース、九寨溝コースは合流してレキシントンプラザミンデホテルで行われるさよならパーティーに全員参加して、今回訪問の最後の夜を楽しんだ。

さよならパーティーでは大西市長の挨拶をはじめ各コースの代表は今回訪問の感想を話した。その後、中国人による民族楽器の演奏や雑技を見ながらビールを飲み、中華料理を食べて歓談。そして訪問中に誕生日を迎えた堀井実知子さん、金倉修さん、松岡久美子さんに JTB からプレゼントを渡され、みんなで「happy birthday to you」を歌って祝った。また訪問団中で最高齢（92）歳の清水ご夫婦と、今日結婚記念日を迎える中西ご夫婦に市長から記念品を渡した。いつまでも睦まじくお元気で！



宴たけなわの頃、南昌育新学校で熱烈な歓迎を受け、子供達と心温まる交流してきたマツケンサンバチームの踊りや市婦人団体連合会の皆様による高松おどり「一合まいた」が披露されると、飛び入り参加が続々と出て会場は始終歓声と笑いの渦。この上海での夜はきっと忘れがたい思い出になるだろう。



【帰国】

2010年10月19日 最終日。5日間にわたって、南昌市をはじめ中国各地を巡り親善交流を深めた今回の旅行も、いよいよ帰国の日を迎えた。

午前7時にホテルを出発し、空港に向かう。それぞれが空港で最後のショッピングなどを楽しんだ後、上海発午前10時の中国東方航空チャーター機に乗り込んだ。

飛行機が高松の上空に帰ってきた頃、機内放送で大西市長および佃団長から、今回の市民親善訪問団の南昌市訪問が成功裏に終わったことを感謝する旨のあいさつがあり、今回の旅行の全日程を終了した。

高松空港に午後1時到着、楽しかった思い出を胸に、お互いに再会を約束しながら元気に帰宅の途についた。

今回の、高松市・南昌市友好都市提携20周年記念市民親善訪問団が、成功裏に終了することができたことは、団員の皆様方の熱意と協力の賜物であります。

これを機会に、高松市と南昌市、そして日本と中国の市民レベルの交流が益々発展することを祈念するとともに、新たな交流の歴史が刻まれるものと思っております。

JTB Your Global Lifestyle Partner **全コース添乗員同行 高松空港発着**

高松空港から中国東方航空利用 **直行チャーター便** 2010年10月14日～10月19日 6日で行く

高松市・南昌市 友好都市提携20周年記念

市民親善訪問団

南昌
江西省の省都、二千年の歴史を有し、国家重点文化名城に指定されている。

2010年 **10月14日**～**10月19日** 6日 日曜出発

◆ 王船 ◆

上海

旅行代金(上海発着)	1,350円別途必要です
◆ 南昌・上海・蘇州コース	159,000円
◆ 南昌・東莞・貴州・上海コース	160,000円
◆ 南昌・上海フリータイムコース	139,000円
◆ 南昌・九寨溝コース	217,000円

上海万博

開催期間: 2010年5月1日～10月31日

高松市・南昌市友好都市提携20周年記念式典参加

高松市と南昌市の交流夕食会開催

ご予約はこちら

JTB中国四国
高松市・(株)高松市国際交流協会

〒430-0818 高松市東三軒がわ

